

フロイトの初期理論とヘルムホルツ学派

ジークフリート・ベルンフェルト

(訳・解題 藤田紘一郎)

フロイトの初期論文は大部分において専門的ではない易しい言葉で書かれており、彼が生み出したところの表現(抑圧、防衛)も日常的な響きを有している。しかし、時折「興奮量」や「放出」、「分離」のような不明瞭な言葉遣いが現れる。その趣向は一八九〇年代の神経学の名残であるように思われる。

フロイトは明らかに彼が一家言を持っている或る理論をほめかしており、精神分析の多くの概念はまさにその理論から由来しているのだ。もっともフロイトはこの理論を詳しく説明することはないで、次のようなきわめて一般的な考えを伝えているだけである。すなわち、「諸々の心的機能の間には、區別されるべき何か(情動量、興奮の総量)、測定する手段を有していないけれども量としてのあらゆる属性をもつ何か、増加したり減少したり、置き換えられたり放出されたりする余地がある何か、身体表面における電荷のようなもので観念の記憶痕跡に敷衍される何かがある。私たちはこの仮定を——ところで、この仮定はすでに私たち「すなわちブロイアー＝フロイト」の浄化反応の理論の根底をなしている——物理学者が電流の概念を用いるのと同じ意味で適用することができ。今のところその適用は、多様な心的

条件の相互関係を示しそれを説明するのに有用であるがゆえに、「正当化される」(Freud, 1894, p.75)。彼がここで「経済論的観点」と「心的装置」の核心を取り扱っているのは明らかである。

フロイトの理論の歴史的起源について知ることは、彼の理論のより良い理解につながるはずである。「放出される興奮」という概念」は『ヒステリー研究』(Breuer & Freud, 1936)においてブロイアーの寄与した部分として念入りに議論されている。⁽²⁾それゆえ『フロイト著作集』には収録されておらず、『ヒステリー研究』の読者には読み飛ばされるのが常である。それを読むのは簡単ではない。フロイトとは違って、ブロイアーの文章は当時の生理学の用語法と思想に密接に結びついているからだ。しかし私たちはフロイトの理論の歴史について関心を持つているため、私たちは彼の年長の友人であり研究のパートナーであるブロイアーの考えを考慮に入れることを強いられる。幸運にもブロイアーの理論は当時の専門用語を取り除けば、いくぶん今日的な装いをもって私たちの前にあらわれるだろう。

I ブロイアーによる概要説明⁽³⁾

その理論はブロイアーが提示している通り、無理なく三つの部分に分けられる。すなわち、(a)脳内の緊張性興奮、(b)興奮を一定の水準に保とうとする傾向、(c)中枢神経系の内部における力動的平衡が攪乱されることとしての情動、の三つである。

A 脳内興奮

「我々は脳の伝導通路を、機能せねばならぬときだけ電気的に興奮する電話線のようなものとして思い浮かべるべきではない。(…)むしろ照明や動力伝達のための、たくさんに枝分かれた電気設備を考えてみよう。このような設備に要求されるのは、すべての電灯と機械が、単に接続されるだけで機能し得るということである。(…)伝導網全体の機能が休止している間も一定の緊張が存続していなければならない。そしてこの目的のためには発電機が一定量のエネルギーを供給せねばならないのである。全く同様に、休止しつつも覚醒しており、いつでも動き出せる準備状態にある脳の伝導通路には、一定量の興奮が存続していることになる」。この興奮に対してブロイアーは「緊張性(脳内)興奮」という(適切でない)名前を与えている。それに加えて、(a)「ポテンシャル・エネルギー。これは「脳」細胞の化学的組成の中にある」と言われている。そして(b)「運動エネルギーというその形式。それは私たちにとって未知であるが、繊維細胞の興奮の状態で放出される(…)この緊張性興奮は放出に関係する(例えば、運動末端神経において(…)電圧が電流に関係するように」(Breuer & Freud, 1936, p.140)。

この引用から以下ことがわかる。すなわち、この理論は二つの思想の集合を含んでいる。一方は興奮についての神経学的な考えであり、ここで興奮は緊張性のものとして特徴づけられ、脳の伝導路に局在化される。他方は心的活動に利用可能な一定のエネルギー量という物理学的概念である。ブロイアー

(2) 第三章「理論的部分」「二 脳内部の緊張性興奮——諸情動」。

(3) この章は『ヒステリー研究』のドイツ語版(Breuer & Freud, 1895)に依拠しているが、引用のページ番号はブリルの翻訳(Breuer & Freud, 1936)を参照している。この翻訳を用いるにあたって特に断りなくいくつかの変更を加えている。

が使った「脳内の緊張性興奮」という名前はこの概念の物理学的意味合いへの配慮を欠いており、神経学的見地を不当に強調している。「興奮」は何かが作動している状態を意味する。それは明らかに興奮の結果によって観察されうるのであり、その効果に応じて「より大きい」あるいは「より小さい」ということで評価される。しかしそれはエネルギー量のように計測可能であるわけではない。この言葉は実のところ質的な用語である。生理学者たちは以下のように仮定していたし、未だそのように仮定しているのである。すなわち、興奮は諸々のエネルギー交換の結果あるいは指標である、と。エネルギー交換同士の関係が未知であるので、用心深い科学の言語は「興奮」というのだが、その意味するところは「エネルギー」である。少なくともブロイアーにおいてはそうだ。

私たちの関心はブロイアーが「何を言わんとしているか」ということにあり、どのようにして彼が自分(の議論)を当時の最先端科学の習慣に一致させて説明しているのかということにあるわけではない。そこで私は、ブロイアーがそこに保持しているところの背景から物理学的側面を取り出し、そして神経学的表現をなるべく控えて、「脳の中で」というような口語的な形式に制限したい。この手続きは明瞭な科学的良識に適合させることができる。観察された興奮は仮定的なエネルギーに重要性で勝る。しかしブロイアーが語るところの興奮はエネルギーと同じぐらい仮定的で全く使い物にならないのである。

かくしてブロイアーの理論は次のような結論に至る。一定のエネルギー量が有機体によって物理化学的エコノミーの中で生産される(あるいは使われる)のだが、それを心的機能のために利用することが可能である。ブロイアーは、それが多様な形式をとるのか唯一つの形式をとるのか、そしてどちらが有機体の身体の内におけるエネルギーについて心的活動に利用可能であるのかという問いを開いたままに残している。それは単純にその使用によって特徴づけられる一定の量でしかない。しかし、彼が語ってい

るのは利用可能なエネルギーすなわち強さの因子、すなわち電位(ポテンシャル)についてであって、エネルギー量の合計についてではないということが、明らかにされている。

このエネルギーは眠っている間に脳細胞によって生産(発出)される。エネルギーがある水準を超えるまで増加したとき、有機体は目を覚ます。これはすなわち心的活動の準備ができていているということだ。心的活動は知覚、連合、思考そして運動神経支配の生産を始める。この方法でエネルギーの蓄えは消費される。ある水準を下回るまで減少すると、有機体は眠りに落ち、新たなサイクルが始まる。

覚醒状態のあいだ、ポテンシャルは三つの仕方で増加する。(1)脳細胞がエネルギーを発出する(という仕方)。そのエネルギーは即座に通常の心的機能によって消費される。(2)有機体の重大な生理学的欲求——酸素や栄養の渴望、渇き、セクシュアリティ——が周期的に利用可能なエネルギーを増加させる(という仕方)。この過剰なエネルギーは生み出された欲求を満足に至らしめる行為の中で消費される。(3)知覚において、外界からのエネルギーがポテンシャルを増加させる(という仕方)。この(増加によって産出された)余剰は連合的な統合によって消費される。

一般に、心的活動に利用可能なエネルギー量は最適な水準の周りで揺れ動く。もしエネルギー量が最小まで減少したら、それを回復させる諸行為(睡眠)が生じる。もし増加したら、減少させるような行為が生じる。かくしてブロイアーは人間の心について呼吸のような自己制御プロセスとして考えるのだが、そのプロセスは脳細胞、脳、身体(分泌腺)そして外界の相対的なエネルギー状況に依存している。

B 脳内興奮を一定水準に維持しようとする傾向性

一定水準のエネルギー、力あるいは形状などを復元するということを示すあらゆるシステムは、目的論的な用語で説明することができる。この手のシステムは統一された全体になる。そのシステムの作用はそれぞれ、妨害的(「システムを攪乱するもの」ないし回復的(「システムを安定化させるもの」)なものとして当該の水準にかかわっている。全体の中でそれらの作用はある機能を有していて、その機能は決定可能である。あたかも水準の維持が目標であるかのように作用するのだ。

ブローアーの図式において、心的活動は余剰となったエネルギーを消費するものとされている。目的論的には次のように言えるかもしれない。すなわち、心的活動は、余剰となったエネルギーを消費する機能、およびポテンシャルを均質化する機能を持つている、と。あるいはこう言えるかもしれない。有機体にはエネルギーを一定の水準に保とうとする傾向がある、と。ブローアーは「エネルギーの消費」という用語よりも「放出」という言葉を好んだ。後者には目的論的な含意がある。ドイツ語の *Abfuhr* にはおそらく英語の *discharge* よりもさらに強い目的論的な色合いがある。

しかし緊張性興奮を一定の水準に維持しようとする傾向は、単にエネルギー消散の法則、その法則に従えばポテンシャルがどこに存在するのであれ一樣になっていくような法則(「熱力学第二法則」を目的論的に翻訳したものではない。ブローアーにとってこの傾向は有機体の欲求であり、「有機体における」他の諸傾向に似ている。例えば、血中の水分量の水準を維持しようとする傾向があげられる。

この欲求の目的は、生体が混乱や不安のない、全方位的な準備が整った精神的覚醒状態にあるような、ある最適なレベルまでポテンシャルを低下させることにある。痛みは欲求が解消されないときにはじめ

て生じるのが常である。だから痛みは、ポテンシャルが最適な水準を超えて増加するのに伴って、あるいはフロイトが時折提示するように(Freud, 1895b)、ある速度でそのような増加が起こるのに伴って、生じる。ポテンシャルが最適な値を下回ったとき、ポテンシャルを再び引き上げることはこの原理の関心事ではない。これは最終的に言うところ脳細胞によって生命活動の一部として行われる。ブローイアーの理論のこの部分は今日の用語にすると、有機体(全体)のモル的な(巨視的な)ふるまいに関連する。言ってみれば、この部分におけるブローイアーの理論は心を、微視的な緊張の蓄積をモル的に排除することとして見ているのだ。

C 情動と転換

情動は脳の中の力動的均衡を妨げることとして捉えられている。私たちは脳をいくつかの領域から成り立っているものとして描写する必要がある。これらの領域のそれぞれに対して、知覚や観念、運動パターンのある複合が対応している。もし一定のエネルギー量がそれらの領域のうちのひとつを占めるならば、(対応する)複合が機能することになる。覚醒し作動している脳においては、エネルギーが均等に割り当てられているわけではない。それはあたかも、いくつもの異なる活動を同時に可能にするには利用可能なエネルギー量が決して十分でないかのようである。ゆえにエネルギー量は一つの領域から別の領域に移り変わり、その際に両者の間でポテンシャルを創出し均等にする。力動的均衡という状態が達成されるのは、主だったポテンシャルが(脳の異なる)領域の間に全く存在せず、いかなる障壁も一方から他方へのエネルギーの通路を妨げたりせず、こうして迅速な均質化が保証されるときである。

感情的な状態において、この均質化は妨げられる。著しく増加したポテンシャルがそれらの領域のひとつにおいて作り上げられる。⁽⁴⁾要するに人は興奮させられ動揺し、「情動的観念」の支配下におかれる。この手の(より高い度合いの強度における)観念によって「観念の流れは妨げられ、諸々の観念の相対的な価値が改められる。(…)知覚(…)「そして」諸感覚の心的な練り上げは価値下げされる」。運動性は「興奮が適切な運動機能において放出されるまで」変容させられる(Breuer & Freud, 1936, p.146)。

欲求、例えば飢えやセクシュアリティが、そのような情動状態を生み出すとき、それには決められた適切な運動機能が存在する。諸々の情動そのもの(怒り、悲しみ、不安、恐怖)に適切な運動機能が存在しないあるいは制止されているがために、均質化は「目的のない」運動放出によって引き起こされる。とても単純に感情表現の謎は解決される。「感情表現は、増加した興奮を均質化し心的平衡を成立し直すこと以外に何の目的もたない。このことをする段階において、感情表現は一定の水準に脳内興奮を維持する傾向に奉仕する。(…)しかしもし情動がそのような放出を全く妨げられていたら、情動は特異な反応を生み出すかもしれない」(Breuer & Freud, 1936, p.147-148)。こうした反応のひとつがヒステリー性の転換である。

これはこの理論に含まれるアイデアのうちのひとつを練り上げることによって説明される。しかし神経システムは「実体に関連している。(…)そこには強力だが克服不可能ではない諸々の抵抗が挿入され、これらの抵抗は「エネルギーの」全体的で均質化された配分を阻む」。例を挙げれば、「血液循環や消化についての(…)神経装置は強力な抵抗によって観念作用の器官(=脳)から分離されている。(…)それらの神経装置は観念から直接に影響されることがない」。

ある状況下ではこれらの抵抗が崩壊する。このことは抵抗が偶々弱くなるところ、または偶々弱くな

るときに生じる。すなわち、いくつかの領域の間の強いポテンシャルが連合的活動によっても運動放出によっても均質化できないときに、あるいはあまりに強すぎて十分に消費できないときに、生じる。そのような遊離の故障はヒステリーにおいて転換の基礎となる。それは放出されなかった情動に対する一つの病理的な反応なのだ。

この理論の評価はさておいて、私たちにあって印象深いのはその射程と一貫性である。しかし肝心な詳細の多くはあまりに粗描的なままであり、それは私が断片的に提示したところだけでなく、練り上げられた原本においても同様なのだ。しかしほとんどの読者はこれら個別のことに対してというよりも、この章が彼らにもたらしただかもしれない両価的な印象のほうに興味があるだろう。

一方では、明白にブロイアーの理論こそが、放出の概念についての「私たちの」説明としてフロイトが参照するところである。本論文の冒頭に挙げた断片的な発言は、明らかにこの理論の一部から来たものである。フロイトは時折この理論を詳述している。そしてブロイアーはフロイトを「興奮の水準を維持する傾向」の命名者として引用している。かくしてこの理論は当時のフロイトの見方として受容すべきである。

他方で、論拠をきちんと列挙できないが、この理論を偉大な心理学者(すなわちフロイト)の描写に適合させることが難しいように思われる。というのも、この心理学者は「自らの心理学を意識的な抵抗として始めたのであり、この抵抗は神経学として十九世紀を通過した不毛な銜学に対する抵抗である」

(4) フロイトはしばしば情動について「総量」として語っている。というのも、この見方に従えば情動はエネルギーがシステムの一部分に集中した結果であり、たいていの場合いくつもの領域を占めるのに十分であるような量と等価であるからだ。

(Ritchie, p.170)。総じて、この理論はあまりフロイト的であるように感じられない。それをフロイトに当てはめるのは彼が初期にカタルシスについて仕事した時期においてでさえ気が進まないことであろう。

もしかすると、当時のフロイトについて私たちが描写したことを見直す必要が幾分あるかもしれない。精神分析の従来の歴史〔記述〕はシャルコーとナンシー学派そしてブローイアー博士の有名な症例から始まっている。シャルコーに出会ったときフロイトは三十歳であり、もはや学生ではなかったが、明確に科学者タイプの人であった。ブリュッケの訓練を受けた員外教授であり、さらに広い意味では、この学派の擁護者でもあった。一八九三年時点のフロイトの考えを再構築するために私たちは彼のカタルシス法以前の時期についての何か、特にブリュッケと彼の学派との関係について知らなくてはならない。奇妙にも、この関係はほとんど考慮されることがない。⁽⁵⁾フロイトがブリュッケのことを今まで影響を受けたものの中で最も偉大な権威であると言っているにもかかわらず、である(Freud, 1927)。

II フロイトとブリュッケ⁽⁶⁾

一八六〇年代に、ドイツの大学において教えられていたある部門が最も興味深く、もっとも遠くまで伝わり、もっとも現代的であるとされていた。その部門とはヘルムホルツ学派の生理学である。その生理学は当時の学生を魅了したが、それはさながら原子破壊が今日の学生の想像力に訴えているのと同様

である。フロイトが一八七三年にウィーン大学医学部に入学した時、生理学はまだその魅力を保っていた。その運動がピークを過ぎていたとはいえブリュッケの生理学研究所はそのときもまだとても活発で名高く、魅力的でさえあった。

この科学的学派の驚くべき成功物語は、四〇年代初めにエミール・デュ・ボア＝レーモン(一八一八―一八九六)とエルンスト・ブリュッケ(一八一九―一八九二)の友情から始まり、ほどなくしてヘルマン・ヘルムホルツ(一八二一―一八九四)とカール・ルートヴィヒ(一八一六―一八九五)が加わった。まさにその始まりからしてこのグループは十字軍のような改革精神によって駆り立てられていた。一八四二年にデュ・ボア＝レーモンはこう書いている。

「ブリュッケと私は支配的なものとしてこの真理を据えるという厳粛な誓いを立てた。(この真理とはすなわち)誰にでもわかる物理的・化学的なもの以外のいかなる力も有機体の内部において関与していない(ということである)」。当座の間、これらの力で説明できないケースにおいては、それらの作用の特殊な仕方あるいは形式を物理学的・数学的方法によって見出すか、化学的・物理的力

(5) 管見の限りでは、Dorer(1932), Brun(1936), Jelliffe(1937)だけがこの点にすでに触れている。

(6) フロイトの初期論文これらは訓練課程の一部である(および彼の自伝的文章の研究者は、しばしば遠く昔の人物および出来事へのさりげない言及に当惑し、それらについてより多くを知りたがっている。だが、文献は手に入れるのが難しい。だから私は自分の主題のためにいくつかの情報を与える気になった。それらの情報はいくつかの書籍でしか得られず、それらの書籍は調べられることが減多にない。(それらの情報を記載するのでこの章はその役割に不釣り合いな長さになる。しかしこの章をフロイトの伝記とするには、一八七三年から一八九五年の期間の伝記としても、はるかに及ばない。だから私は二つの根拠から自分自身を非難にさらすことになる。――私は(情報を)与えすぎている、かつ十分に与えられていない。

と同等の尊厳を持つ、物質に内在し、引力と斥力という力に還元可能な、新たな力を仮定する必要がある。」(Du Bois-Reymond, 1925, p.19)

彼らは少し私的なクラブを形作り、一八四五年にはベルリン物理学協会へと拡大させた。ほとんどのメンバーはヨハネス・ミュラーの若い学生たちだった。彼ら物理学者ないし生理学者たちは生気論を決定的に破壊するために互いに結束していたが、この生気論とは彼らの敬愛すべき師匠の根本的な信念であった。奇妙にも、ヨハネス・ミュラーは「このことを」氣にしていなかった。一八四七年七月二三日にこの協会の会合で、ヘルムホルツが妥当な基盤を新しい生理学に与えるという控えめな目的でもって、エネルギー保存則についての論文を読み上げた。かくして人知れずこの世紀の指導的な生理学者の一人のキャリアが始まった。デュ・ボア・レーモン、ブリュッケ、ヘルムホルツ、そしてルートヴィヒは生涯の友人であり続けた。二十五年から三十年のうちに彼らはドイツの生理学者たちと医学教師たちの思想に対して完全なヘゲモニーを有するに至り、強烈な刺激を各地の科学に与え、いくつかの旧来の謎を永久に解決した。生気論の方はどうかというと、彼らが生きているうちに再び持ち上がったように見える。しかし、七〇年代になると彼らと彼らの生理学は支配的なものとなり、真剣に異議申し立てられることはなくなった。

ベルリンで「我々の極東大使」と「冗談めかして」呼ばれていたウィーンのブリュッケは、自分の教室では精緻な記録をつけることにたいへん徹底的であり続けた。これらの記録を彼は一八七四年に『生理学講義』(Brücke, 1874)として出版した。最初の四十ページは実質上、物理生理学の一般的な観念を含意し、この生理学は若きフロイトを虜にした。

生理学はそれ自体では有機体の科学である。有機体は死んだ物質全体〔すなわち機械〕から同化能力を有する活動ないし機構であるという点で区別される。しかし、有機体はすべて物理世界の現象でもある。物理世界とはすなわち原子のシステムであり、力によって動かされ、ヘルムホルツによって定式化されたエネルギー保存則に従う。〔エネルギー保存則によると〕力〔エネルギー〕（運動の力〔運動エネルギー〕とポテンシャルの力〔ポテンシャルエネルギー〕）の総量はあらゆる独立系において一定に保たれる。実在的な原因は科学において「力」という言葉で象徴される。それらの原因について知らなければ知らないほど、より多くの種類の力を区別することになる。力学的、電氣的、磁力的な力、光、熱といった具合に。知見が向上することでそれらは二つのもの——引力と斥力——に還元される。これは同様に有機的な人間にも当てはまる。デカルトとは反対に、私たちが経験し私たちの自我に起こる絶え間ない変化が外的要因の効果ではないと信じることは私たちにはできない。そうしてブリュッケは全二巻の精緻な概要説明に取り掛かる。それは、生ける有機体における物理的な力の変形と相互作用についてそのとき知られていたことを説明している。「物理的な力は互いに助力あるいは制止しあったり、組み合わせたり、妥協したりする」。ここで引用した言葉によってフロイトは一九二九年に精神分析を力動的観点から説明している(Freud, 1929, vol. XVIII, p. 673)。これより良くブリュッケの『講義』の精神と内容を説明しているものを私は知らない。

この精神はフロイトが一八七六年から一八八二年まで在籍していた生理学研究所でも作用していた。当時のブリュッケの助手であった、ジークムント・エクスマー（一八四六—一九二五）とエルンスト・フライシュル・フォン・マルクソフ（一八四六—一九九二）、両者ともに準教授、は科学に身をささげた才能ある人間であり、熱心な物理主義者であった。

フライシユルとの友情はフロイトにとって大切なものであった。彼は物理学に関する論文を生理学に關するものと同じぐらい出版していて、彼の考えでは生理学に適用できるのは物理学と化学のみであった。そのような態度は彼の家系の中に流れていたように見える。彼の叔父セルマック（一八二八—一八七三）は喉頭鏡検査法と検鼻法の開発者の一人だが、ライプチヒ大学に立派な生理学実験室を寄付しただけでなく、高校生だった甥のエルンストにも顕微鏡を与えていた。エルンストの方では気前よく、同級生のエクスナーにこの素敵なおもちゃの恩恵を分け与えた。

あらゆる医学生は「生理学」を通り抜けねばならなかったが、とにかく科学に興味があった学生は誰も無傷で通り抜けることはなかった。フロイトに關しても、それは深く持続的な印象を与えた。数年の動物学および化学への取り組みが散漫で期待はずれなものに終わったあとで、フロイトは生理学研究所に腰を落ち着け、「偉大なるブリュッケ」と「聡明なるフライシユル」に魅了された。二人とも華やかな性格ではなかったが、フロイトは彼らのことを「尊敬できて、私の模範とすることができた」人間として回想している。

ブリュッケは背が低く、頭が大きく印象的で、バランスの取れた歩き方をし、素早くきびきびとコントロールされた動きをする人であった。唇は小さく、「恐るべき碧眼」が有名で、内気というよりも厳しく、ことのほか寡黙な人でもあった。プロテスタントであり、プロイセンの話し方をしていたので、カトリックの街ウィーンではマイノリティ集団に位置づけられることがほとんどだった。隙間風を心配していたので、決して脱帽した姿を見せなかった。研究所では暗い色をした絹製のベレー帽を常にかぶっていたのだ。学生との間には距離を保ち、十分に熟す前の論文やアイデアを議論することはなかった。実直で根気強い仕事人であり、他者への要求は穏やかな *gemütlich* ものではなかった。二十年後に夢の

中でフロイトは、ブリュッケが日課の朝の巡回の時にフロイトが遅刻しているのを見つけた時の様子を思い出して、未だに震え上がることができた。ある学生が一篇の自分の論文に「表面的な観察が明らかにすることには」と書くと、乱暴に取り消し線がひかれ、「観察は表面的であってはならぬ」というブリュッケのコメントが余白につけられて返却された。彼は最も恐れられた試験官の一人であった。もし受験者が最初の質問の答えにまごつくと、既定の試験時間の残り十〇二分は座ったまま頑なになって沈黙を貫き、受験者や学部長の訴えに耳を貸さなかった。一般的な見方では、冷徹で完全に合理的な男としてのレッテルが貼られていた。この表向きの態度を築き上げるために彼がどの程度の自分自身と自分の感情に対する激しい力を必要としていたのかは、一八七三年に彼の最愛の息子が死んだときの反応によって明らかにされる。彼は自分の家族や友人に息子の名前を口に出すことを禁止し、息子の写真を視界に入らないようにし、そして前にもまして仕事に打ち込むようになった。しかし、この人は虚栄心や不義、権力欲とは全くの無縁であった。自らの能力を証明した学生に対しては最も慈愛に満ちた父のようであったし、学問についての問題に限らず助言と庇護を与えていた。学生自身のアイデアを尊重し、独自の仕事を奨励し、自分自身の意見から著しく逸脱していたとしても才能ある学生を支援した。弟子や友人たちは誰も彼を裏切るようなことにはならなかったと言われている。

多くの点でフライシユルはブリュッケと全く反対だった。彼は若く、ハンサムで、熱狂家で、聡明な語り手であり、魅力的な教師だった。古きウィーン社会の魅力的で感じのいい礼節を有していたが、いつでも科学的ないし文学的問題を挑戦的なアイデアの流れでもって議論することができた。これらの質は彼の生理学の英雄かつ殉死者としての痛ましい役回りと奇妙なコントラストをなしていた。二十五歳のとき病理解剖の研究を行っているあいだに、彼は感染症にかかってしまった。右手の親指を切断する

ことで彼は死を免れた。しかし神経腫が継続的に成長し、度重なる手術を余儀なくされた。彼の人生は痛みとゆっくりと迫りくる死による終わりなき生き地獄となった。この欠損し痛みでうづく手で実験の作業を技術的に申し分なくこなした。眠れない夜は物理学と数学を勉強していた。科学における技能が向上してこの薬が効かなくなったときは、サンスクリット語を勉強した。

両者にとって、科学は私的な痛みや心配事、そして死よりも重要であった。彼らにとって科学的な仕事は人生と融合して一つの確固たる活動の流れとなっていた。科学的な仕事はかなり自己の一部となっていて、科学の発展に首尾よく貢献しようという野心でさえ科学の発展そのものに重要度で及ばないほどだ。もちろん限度はあったが。しかしこの手の科学者は明らかに、この職業に特有の平均像がそうであるほどにも、虚栄心をのぞかせることがない。もしそれが、フロイトが自分で前意識的に考えていた生き方だったならば、生理学研究所の教師たちは模範として実的に確かな存在であった。

ヨーゼフ・ブロイアーもまさしくこのタイプだった。フロイトは彼と生理学研究所で出会ったが、そこでよく会っていたかもしれない。精神分析での説明のほとんどでブロイアーは「ウィーンの臨床内科医」とラベル付けされている。しかし彼はそれ以上の人だった。ブロイアー（一八四一—一九二五）はブリュッケの研究所で訓練を受け、科学者かつ質的思想家かつ「物理学的」生理学の強力な信奉者になった。哲学者フランク・ブレンターノ宛ての手紙で彼はこう打ち明けている。「私にはある脳の病変があります。アメタフィジア（『無形而上学症』です）。一八六七年に卒業した後、彼はウィーン大学の内科診療所でオッポルツァーの助手になった。一八六八年に員外講師になった。一八七一年に開業して臨床に携わるようになったが、大学でも一八八五年まで教鞭をとり続けた（フロイトが大学にいたあいだ、彼は腎臓と消化器官の病気について講義していた）。公刊されたものはほとんどないが、それでも重要な研究のうちのいくつか

は今では古典として考えられている。一八六八年に彼は迷走神経による呼気と吸気の自己制御を発見する。一八七三年から一八七五年に耳の迷路にある半規管の機能と耳石の機能を発見し、その正確なメカニズムを実験によって確認した。⁽⁷⁾ 彼はこれらの実験を自分の家で空いた時間、たいていは夜に行っていた。一八九四年にマッハ、ヘリング、エクスナーの推薦でウィーン科学アカデミーの客員に選出された。一九〇七年に鳥の聴覚器官についてのモノグラフと電気けいれんの影響下にある魚の進路取りと姿勢についての複数の実験を刊行した。臨床医としても卓越した称賛と信頼を得ていた。彼はブリュッケやエクスナー、フライシユル、ビルロート、クロバック、その他たいへんに高名なウィーン医学界の多くの大物の主治医であった。

これらの人物たちの落ち着いていて魅力的な力に加えて、ある「親和力」がフロイトをブリュッケの学派へと駆り立てていた。六年間フロイトは個体発生的に、若きフロイトにとって大切なダーウィンの用語でいうならば、過去七十年間の思考の系統発生を反復していたのである。

この「生理学」は西洋文明における全体的な流行の一部だった。徐々に、継起的に、この生理学はそれ以前の二、三百年を通していたるところで沸き起こっていた。十八世紀の終わりから着実に勢いを得て、三〇年代以降に急速に速度を増し拡大していった。ドイツでは付加的な注目、特殊な情緒の色合いを帯びた。この流行は、イギリスやフランスに比べれば弱かったが、およそ一七九四年から一八三〇年まで(フランス大革命からフランス小革命(Ⅱ七月革命)まで)のあいだ、自然哲学の時代によって中断された。自然哲学は汎神論的一元論の名前であり、神秘主義に近く、シェリングによって表明され、多数の作

(7) これらの発見の両方がエルンスト・マッハによって、一部がクラム・ブラウンによって同時期に独立になされた。

家によって反復され、発展され、多様化された。そして平均的な教育を受けた男性たちや文芸に詳しい女性たちによって熱心に受容された。(自然哲学の考えによると宇宙、自然は一つの巨大な有機体である。この有機体は究極的には諸々の力や活動、創造、発生によって構成されているが、(これらすべてが!)恒久的で基本的な闘争のうちに、対立のうちに組織されているのである。理性、意識的な生、知性、これらはこの無意識の騒乱の反映、流出にすぎない。これらの考え方はそれ以前も以後も示されていて、十九世紀や今日のいくつかの科学理論の種を含んでいる。しかしこのことは、それらの考え方が(自然哲学の)運動の特性であるというわけでも、ロマン主義的気質にそれらが包まれていたというわけでもない。「むしろ」これは一般的なヨーロッパの流行だったのだ。ドイツ自然哲学を特徴づけているものは(シェリングが自分の取り組みに与えたところの「思弁的自然学」の名で示されるような野心と、これらの著述家の幻想とスタイルである不均衡で誇大妄想的な感情過多である。フェヒナーは(自然哲学者の)突出した典型であるオーケンの「巨大な大胆さ」を称賛しているが、それに対してある慎重なイギリスの歴史家はこう述べている。「それらは、ヨーロッパ思想の方向とは無縁であるようにみえる諸傾向を示す。すなわち、それらは東洋の曖昧な広大さと半ばオリエント風のアレキサンドリア学派におけるその反映を思い起させる」(Brett, p.129)。

「物理主義」生理学は、それ自身によってではないが、哲学を放棄し、それに置き換わった。それ以前に起こったように、征服者は彼の犠牲者の感激性を取り込んだ。「科学の統一」、「科学」、「物理力」は単なる指示的な観念だとか、科学的取り組みにおける仮説ではない。それらはほとんど崇拜の対象となった。それらは研究の方法以上のものであって、世界観となっていた。この気質の度合いは科学者や場所によってさまざまであった。デュ・ボア＝レーモンのいたベルリンにおいては最大になっていて、

奇妙にもプロイセン・ナシヨナリズムと混合していた。オーストリアでは、自然哲学が大きな影響力を持っていたことがなく、生理学の熱狂はウィーンないしブリュッケにおいて最小限のものであった。とはいえそうした熱狂はそこにあった。

自然哲学への熱中を通してこそ、フロイトはブリュッケの「物理主義」生理学に至った。ギムナジウムを卒業する少し前に、すなわち一八七三年の夏の初めに、「ゲーテの自然についての美しいエッセイが大声で読まれたのをカール・ブリュール先生の一般向けの講義で聞いたことで、彼は医学生になろうと決めた」(Freud, 1935)。彼は医学を追求めたわけではない。彼は内科医の活動に興味がなく、その社会的立ち位置に感銘を受けることもなかった。医者になることは決して理想的なことではなく、むしろ政治において指導的な役割を演じるという彼の野望を妨げるということの意味していた。この「政治的な」衝動はハンニバルやマセナ將軍、そしてオリヴァー・クロムウェルに同一化するという子どもの頃の夢想に由来する。医学部に入学するということは単に自然科学を研究するための唯一の現実的な方法であった。「物理主義」生理学のリーダーたちはみな医学博士であり、ブリュッケやデュ・ボア＝レーモンのように生涯で患者を診ることがなかったか、ヘルムホルツのように早期のごく短い期間にやむを得ず内科医として従事していたかである。

この「医学部に進むというフロイトの」選択を決定づけた人、すなわちゲーテは自然哲学の先駆者であった。彼の学問的エッセイにおいて(そしてこの領域においてのみ)彼自身も自然哲学者であるが、しかし穏健でバランスの取れたものである。この「短い比較にならないほど美しい自然についてのエッセイ」(Freud, 1938, p.420)はある種、ドイツ自然哲学初期の精神のプログラムである。⁶⁸⁾

ゲーテや後のシェリングの世代の場合と同様に、フロイトの心理においても、子どものときの神が彼

の思考に対する支配力を失ったのちに汎神論的な感覚が訪れたが、それにもかかわらず神は(フロイトの)生涯の思考の対象として存続した。フロイトが若い時分の「物理主義」生理学への熱狂において短いあいだラディカルな唯物論に傾倒していたということを私たちが知るとき、その類似性は滑稽なほど完璧なものになる。神秘的な観念論、あるいはあらゆる種類のロマン主義哲学に対するこの反応は、フロイトより前の世代に始まるもので、一八七〇年頃はビュヒナーやフォークト、モレスコットが教養のない人の間で未だ驚くほど人気だった。

初めからフロイトのこの生理学への興味は受動的なものではなかった。彼は科学アカデミーに寄せる前の彼の論文を読んだブリュッケを十分に満足させるまで研究をやり遂げた。(そして)彼は研究所のデモンストレーター(ある種のティーチング・アシスタント)になった。彼はブリュッケの助手になれることをあてにする資格をそろえていた。心中では研究をキャリアとしようと考えていたので、彼は自分の医学カリキュラムの修了を焦ってはいなかった。ほかの願望や葛藤を持たずに勉強と研究に没頭したことで、フロイトは若き時分のブリュッケの研究所での七年間を幸福に過ごした。

フロイトが研究所を離れて開業医になったときも、彼は自分の科学的な志をあきらめなかった。次の十年のあいだ彼は主題も方法も変えなかった。決して途中でそれらを変えなかったのである。精神分析が新しく革命的な主要物であるにもかかわらず、その核心はフロイトがブリュッケの下でした仕事の延長なのだ。

ブリュッケがフロイトの関心を引き込んだところの主題とは中枢神経系であり、換言すれば、心理学である。というのも生理学研究所において心理学はそう理解されていたのである。七〇年代の生理学研究所では顕微鏡によるアプローチと実験的アプローチが未だ結びついていた。実に、生理学的実験(今日

の生物物理や生化学を含む)がより完全に王道になりつつあり、一部の生理学者は顕微鏡使用者を軽蔑するのにつけていたが、ブリュッケはそうではなかったのである。彼は自分の分野をウィーン大学のジャーンを用いて生理学および高等解剖学として公表していた。その「活動中の物理システム」の空間構造を知るのは、この装置において働き、変化させ、再生産する諸々の力について知ることと同様に、必要である。この構造は顕微鏡によって明らかにされねばならない。ブリュッケの考えでは、解剖学と生理学、顕微鏡(による観察)と実験の間に何の対立もない。これは細胞の構造についての彼の最初の仕事(「要素的有機体」)を有名にしたアプローチである。

この信念のもと、学生であるフロイトはブリュッケとの年月のあいだ膨大な量の価値ある顕微鏡的研究⁽⁹⁾を行い、「ウィーン」総合病院の研修医としてもそれを継続した。そして一般病院で開業の準備を始めた。神経学の臨床的研究は徐々に解剖学的研究にとって代わった。シャルコーに出会った後でさえ、カタルシス法を行う間でさえ、臨床神経学は神経解剖学のように、ただ「物理主義」生理学の一部であった。臨床的観察は、肉眼と耳によってなされるとしても、脳の構造と力動を、生物学の素朴な全盛期に言われていたのに従ってより一般的に言えば、機械としての人間の構造と力動を明らかにするのに有用な素材である。

ある決定的な一片の証拠は失語症についてのモノグラフ(Freud, 1891)であり、これはブロイアーにさげたもので、一八九一年に発表された。このあまり知られていない著書は最初の「フロイト的」著作

(8) このエッセイの英訳はウィットテルスの書籍(Writels, 1931)に盛り込まれ、抜粋されたパラグラフがジンメルの論文(Simmel, 1940)に現れる。

(9) ブラン(Brun, 1936)はカタルシス法以前のフロイトによる三十の論文を列挙(かつ評価)している。

で、スタイルの大変な単純さ、説明の明快さ、読者をじらすようなアイデアの隠し方を伴い、読者はあたかも著者と同じ情熱的な探偵であるかのようなようだ。フロイトはマイネルトやヴェルニッケらによって推し進められていたような、脳解剖学に基づいた当時の理論を厳しく批判する。しかしそれは彼が「脳ぬきの」心理学ないし精神病理学を構想したからではない。対照的に彼自身の理論は厳密に「物理主義的」である。それは基本的にエクスマーとパネート⁽¹⁰⁾に従うものであり、部分的に彼らから直感を得たものである。彼はヒューリングス・ジャクソンの考えを高く評価しているが、ジャクソンは当時ほとんど知られていないか「狂人理論家」として非難されていた。彼は臨床的観察のデータを用い、このデータは解剖と心理学を脳の構造と作用の手がかりとして含んでいる。彼の意見では局所論者は力動を無視していて(というのも彼は力を局在性に対立するものとして強調している)、さらに悪いことに局所論者は自分たちが発見した中心の構造について誤った考えを持っている。彼の理論は粗描されただけのもので、ブローアーが数年後に『ヒステリー研究』で展開したのと同じ理論であると主張するのは仮定にとどまるかもしれない。しかしそれらは際立って類似している。

ブリュッケこそ、フロイトを顕微鏡に向かわせたその人である。それはフロイトの意志にはほとんど反していない。精神分析の手続きが実験と論理的に等価であるという事実にもかかわらず、フロイトは決して実験をしなかった(有名なコカインの話を除く)。彼の方法は受動的に見聞きするというものがあり、対象への干渉は最小限にとどめた。彼は電気治療器の使用や催眠は早々にあきらめたが、それは彼がそうしたお粗末な干渉的行動を用いることを不細工で窮屈であると感じたからである。統治すること、治療すること、教育すること、彼は繰り返しこれらのことをする意思を持ち合わせていないことを打ち明けてきた。彼は精神分析を考古学者の仕事とよく比較した。考古学者はただ長年の堆積物を取り

去り、その下に隠されていたものを見出すだけである。

七十四歳のときフロイトはある厳粛な場でこう言った。「私の生涯の仕事はただ一つの目標に向かっていた。すなわち、心的装置がいかに構築され、そこでどのような力が作用し対抗しあっているのかを推定あるいは把握することです」(Freud, 1925)。彼はここで自分の精神分析の仕事を参照している。しかし私たちが今見てきたように、この主張は彼の科学的取り組みのすべてを包含していて、奇妙で希少な魚のある神経細胞に関わる最初期の研究に遡ってもそういえる。もっと前にさえ遡れるだろう。ブリュール教授によるゲーテの詩が引用されていた(フロイトの人生において)きわめて決定的な講義の主題は、比較解剖学であった(Du Bois-Reymond, 1927)。

III 最初期のフロイト理論

前章において関連する事実は、フロイトのブロイアーによって提示された理論に対する関係についてのいかなる疑いも一掃する。ブロイアーの理論は「物理主義」生理学の精神の中で着想され、フロイトの初期の思考に完全に一致する。そしてフロイトがブロイアーと協働していた時期の彼の考えを表して

(10) ヨーゼフ・パネート(一八五七—一八九〇)は、夭逝したフロイトの友人であり、生理学研究所での後輩。『夢解釈』に「友人ヨーゼフ」として著される。

いる。この理論は二人の男の間で生氣あふれる議論が多くなされる中で展開され、形成された。この理論はブロイアーの理論であるのと同様にフロイトの理論でもあるのだ。

ある短い論文(Breuer & Freud, 1940)が一八九二年一月にフロイトの手書きによって書かれたものの一九四〇年まで刊行されなかったが、この論文はこの想定が強固なものであることを示し、「自然についての断片」の時から、あるいは少なくとも神経解剖学の論文の時から『ヒステリー研究』の時までのフロイトの思考における連続性を確立している。この論文のタイトルは「ヒステリー発作の理論に向けて」であり、ブロイアーとフロイトの共著である。明らかにブロイアーとフロイトの最初の研究報告として意図されており、理由は定かでないが一八九二年一月に書かれ一八九三年に刊行された「ヒステリー諸現象の心的機制について(講演)」(Breuer & Freud 1893)に差し替えられている。「ヒステリー発作の理論にむけて」全体が「ヒステリー諸現象の心的機制について(講演)」の一部となっているが、結びのパラグラフは除外されている。この結びのパラグラフでは理論の短くも的確な概要が与えられており、三年後の『ヒステリー研究』においてブロイアーによって練り上げられた形で示される。

なぜブロイアーとフロイトは最初の出版物からこの理論への言及を消去したのか？ なぜフロイトはこの本における洗練された説明(の部分)をブロイアーに残したのか？ そしてなぜ彼は自身の初期論文の中で言及を要約するのを自制したのか？ これらの理由はわからない。しかし私たちは一八九二年から一八九五年の間に心境が変化したと推察することはできない。なぜなら、もっとのちにフロイトはこの初期理論を精神分析に経済論的観点として組み込んでいるからである。このとき、例えば一九二五年に「心的装置の目的はそれが依存するところの興奮の総量を可能な限り低く保つことにある」(Freud, 1929)の「言いつけ」、彼はブロイアーの用語法によって定義さえしている。繰り返し(例えば一九二三年と一

九二五年に)フロイトは『ヒステリー研究』のブローイアーによる理論的章節への注意を促し、これらの考
えが精神分析の将来的な発展のために重要であることを強調し、それらが包括的に用いられていないこ
とを残念がっている(Freud, 1922, 1925)。一九二三年に、ウィーン精神分析協会の若いメンバーに初期論
文におけるいくつかの矛盾について質問攻めにされたときフロイトはこう言った。⁽¹²⁾「この問題が存在す
るのは単に、三十年前の私がいつの日かあらゆる詳細が受け入れられ一字一句に至るまで神聖化される
ことを見越せなかったために、あまりにもざっくりばらんに書いてしまったからだ」と。続けて彼は情動
概念の意味を興奮の総量として明らかにし、そのことを決して否定しなかった。

この理論の一八九五年以後の歴史はここでの関心ではない。上記のフロイトののちの態度についての
引用はただこの研究論文の結論を補強するためだけのものであり、その結論は次のようにまとめられる。
カタルシス法を研究する日々の中で生み出された新事実の実り豊かさを前にして、フロイトは抑圧、
防衛、除反応といった数々の新しい概念を導入した。それらの概念は新しい素材をまとめ、すでもた
らされていた素朴かつ科学的な知識に統合するのによく適していた。それらは長年の様々な研究による
吟味を耐え、新しい事実や応用、発展に適用可能であることを証明した。しかしフロイトにとってそれ
らは単に記述的な用語だった。それらは事実を説明するものではなく、それら自体が説明を、真に「物
理主義的な」大志を必要としていた。とうとうフロイトは彼にとっての最終的かつ完璧な説明とみられ

(11) (訳注)当該のパラグラフは以下の通り。「このようにして我々は、ヒステリーの学説にとって使用可能な、心的外傷について
の一つの定義をも、手に入れることになる。神経系にとって、連想を用いた思考作業によっても運動性の反応によっても除去
することが困難な印象はすべて、心的外傷になるのである。」

(12) 一九二三年一月三十一日の会合。筆者のファイルにある議事録の写し。

るものに至らなかった。彼は様々なアプローチを試した。いわゆる精神分析理論は、精神分析の発見や発明は別として、科学的説明のためのフロイトのこうした努力の総体である。

彼の初期の理論は厳密に「物理主義」生理学の精神におけるものだった。その精神は野望であり、単にせき止められた感情を除反応するということを超えてもっと広い範囲にわたっている。それが考慮しているのは、有機体全体、身体の構成、脳、脳細胞と環境とそれらの間の物理的エネルギーのポテンシャルであり、そのような〔物理的〕ポテンシャルがそうでなくてはならないように、このポテンシャルも最終的な均衡へと向かおうとする。欲求、感情、睡眠、覚醒時の合目的な行動などは、すべて特定のエネルギー状況として考えられ、それらの状況はポテンシャルの量と方向づけ、そしてその間にポテンシャルが存在する諸システムによって決定される。例えば、知覚は外界と脳の間のポテンシャルに、感情は脳内部のポテンシャルに、飢えやセクシュアリティ、および類似した欲求は身体と脳の間のポテンシャルに結び付けられる。個人の行動は、外的にせよ内的にせよ、直接的にせよ象徴的にせよ、意識的にせよ無意識的にせよ、結局のところ、脳細胞の代謝によって生み出されたエネルギーの（ミクロな）蓄積を適切な方法で取り除こうとする（マクロな）欲求によって方向づけられる。あらゆる行動はこうして作りだされたポテンシャルによって利用可能なエネルギーにより行われる。もし適切な行動が存在しないか内在しているとしたら、人は代替を発明するか不適切な行動に訴えるかしなければならないだろう。その行動こそが異常性という性格を、特に神経症の症状の性格を有することになるのである。

文献目録

- Benedikt, M. (1906). *Aus meinem Leben*. C. Konegen.
- Boruttau, H. (1922). *Emil Du Bois-Reymond*. Rikola Verlag.
- Brett, G. S. (1921). *A history of psychology* (Vol. 3). G. Allen & Co.
- Breuer, J., & Freud, S. (1940). (1892) *Zur Theorie des hysterischen Anfalles*. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse und Imago*, 25, 107-110.
- Breuer, J., & Freud, S. (1893). *Über den psychischen Mechanismus hysterischer Phänomene: Vorläufige Mitteilung*. In *Gesammelte Schriften* (Vol. 1). (Original work published 1893).
- Breuer, J., & Freud, S. (1895). *Studien über Hysterie*. Verlag F. Deuticke.
- Breuer, J., & Freud, S. (1936). *Studies in hysteria* (A. A. Brill, Trans.). *Nervous and Mental Disease Monograph Series* No. 61. (Original work published 1895).
- Brücke, E. (1874). *Vorlesungen über Physiologie* (2 vols.). W. Braumüller.
- Brücke, E. T. (1928). *Ernst Brücke*. J. Springer.
- Brun, R. (1936). *Sigmund Freuds Leistungen auf dem Gebiet der organischen Neurologie*. *Schweizer Archiv für Neurologie und Psychiatrie*, 37, 200ff.
- Dorer, M. (1932). *Historische Grundlagen der Psychoanalyse*. F. Meiner.
- Du Bois-Reymond, E. (1927). *Zwei grosse Naturforscher des 19 Jahrhunderts: Ein Briefwechsel zwischen Emil Du Bois-Reymond und Karl Ludwig. J. A. Barth*.

- Eisenberg, L. (1893). *Das geistige Wien: Künstler- und Schriftsteller-Lexikon*. 2. Bd. Mediz.-naturw. Theil. Wien.
- Exner, S. (1893). *Biographische Skizze*. In E. von Marxow Fleischl, *Gesammelte Abhandlungen*. Fleischl von Marxow, E. (1893). *Gesammelte Abhandlungen* (O. Fleischl von Marxow, Ed.). Leipzig.
- Freud, S. (1891). *Zur Auffassung der Aphasien: Eine kritische Studie*. Verlag F. Deuticke.
- Freud, S. (1894). *The defense neuro-psychoses* (J. Rickman, Trans.). In *Collected papers* (Vol. 1, p. 59).
- Freud, S. (1895a). *The justification for detaching from neurasthenia a particular symptom syndrome: The anxiety neuroses* (J. Rickman, Trans.). In *Collected papers* (Vol. 1, p. 76).
- Freud, S. (1895b). *A reply to criticisms on the anxiety neuroses*. In *Collected papers* (Vol. 1, p. 107).
- Freud, S. (1938). *The interpretation of dreams* (A. A. Brill, Trans.). In *The basic writings of Sigmund Freud*. The Modern Library. (Original work published 1900).
- Freud, S. (1922). *‘Psychoanalyse’ und ‘Libidotheorie’*. In *Gesammelte Schriften* (Vol. 11, p. 201).
- Freud, S. (1935). *Autobiography* (J. Strachey, Trans.). W. W. Norton & Co. (Original work published 1925).
- Freud, S. (1925). *Josef Breuer. Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 11, 255-256.
- Freud, S. (1927). *Concluding remarks on lay analysis*. *The International Journal of Psycho-Analysis*, 13, 392.
- Freud, S. (1929). *Psychoanalysis*. In *Encyclopædia Britannica* (14th ed.).
- Freud, S. (1930). *Ansprache im Frankfurter Goethe-Haus*. In *Gesammelte Schriften* (Vol. 12, p. 408).

- Jelliffe, S. E. (1937). Sigmund Freud as a neurologist. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 85.
- Koenigsberger, L. (1906). Hermann v. Helmholtz (3 vols.). Oxford.
- Lazarus, M. (1906). *Lebenserinnerungen* (N. Lazarus & A. Leicht, Eds.). Berlin.
- Lorenz, A. (1923-1927). *Autobiographie*. In *Medizin der Gegenwart in Selbstdarstellungen* (Vol. 3). F. Meiner.
- Meyer, H. H. (1928). Josef Breuer, 1843-1925. In *Neues Österreichische Biographie: 1815-1918* (Section 1, Vol. 5). Wien.
- Ritchie, A. D. (1936). *The natural history of mind*. Longmans, Green & Co.
- Simmel, E. (1940). Sigmund Freud: The man and his work. *The Psychoanalytic Quarterly*, 9, 163.
- Universität Wien. (1898). *Geschichte der Wiener Universität von 1848 bis 1898* (Akad. Senat d. Wiener Univ., Ed.). Wien.
- Universität Wien. (n.d.). *Vorlesungskataloge*.
- Wittels, F. (1931). *Freud and his time*. H. Liveright.

解題

本論文は Bernfeld, S. (1944). Freud's earliest theory and the school of Helmholtz. The Psychoanalytic Quarterly, 13, 341-362. の全訳である。

著者ジークフリート・ベルンフェルトは素人分析および思春期心理学の先駆者であり、ウィーン精神分析サークルの重要人物の一人であり、かつ最初期にフロイトの伝記に取り組んだ人物でもある。⁽¹⁾

一八九二年、ガリツィア地方レンベルク(現ウクライナ、リヴィウ)で生を受ける。生家はウィーンの郊外で織物商を営むユダヤ人の一家であった。植物学と動物学を修め、自然科学に関する確かな知識を得たのち、心理学と教育学の研究に従事する。

シオニスト活動家およびオーストロ・マルクス主義の活動家としても有名で、一九一八年にはウィーンでシオニストの若者を結集させて巨大な連合を組織している。一年後にユダヤ人の戦争孤児に特化した孤児院を設立した。

同じ年にウィーン精神分析協会のメンバーになり、ジークムント・フロイトと対面する。フロイトは彼をマックス・アイティンゴンおよびベルリン総合病院に推薦したが、結局一九二二年にウィーンで精神分析家として開業した。彼は幼年期および思春期に関心を寄せる同志たち、具体的にはアンナ・フロイト、ヴィルヘルム・ホッフアー(ウィリ・ホッフアー)、アウグスト・アイヒホルンの三人と作業グループを結成する。

一九二五年に単著を二冊刊行する。一方は乳幼児心理学に関するものであり、他方はシシュポスの神

話に焦点を当てている。後者は当時のドイツにおける教育法が独裁制の成立を助長するものであると告発する内容であった。

私生活では好色家であったと伝えられており、三度の結婚を経験している。三番目の配偶者であるスザンヌ・カシレ＝パレはもともとフロイトの分析を受けていて、結婚後はベルンフェルトのかけがえのない協力者となる。ナチスが政権をとった後の一九三四年に自分の母親とスザンヌ、彼女の連れ子であるペテルとルナート、そして最初の配偶者との娘ルートを伴って亡命する。ヨーロッパ各地を転々としたのちヨーロッパを離れ、一九三七年にサンフランシスコに落ち着く。渡米後、彼はサンフランシスコ精神分析協会(San Francisco Psychoanalytical Society: SFPS)の設立にかかわる。弟のマンフレット・ベルンフェルトはテレージエンシュタット・ゲットーで亡くなり、ジークフリートの家族の中にはアウシュヴィッツに送られたものもいた。

他の亡命した分析家とは違って、彼はアメリカの精神分析に適応せず、欲動理論に特徴づけられる「ウィーン的精神」を死没するまで墨守した。こうした背景からフロイトの伝記作成やフロイディズムの起源の探究に取り組むようになる。フロイトの伝記が執筆される際、アンナ・フロイトは友人のベルンフェルトではなくアーネスト・ジョーンズに執筆を委ねるが、ジョーンズの仕事にもベルンフェルトの仕事は大いに活用されている。

一九五三年に肺がんで世を去るが、その直前に教育分析の歴史に関する講義を行い、国際精神分析協会の内部で行われている分析家養成制度のあり方を容赦なく批判している。これは波紋を呼び一九六二年になるまで正式に刊行されなかった。ベルンフェルトはアメリカ西海岸にて異端の精神分析家として没したのである。

*

本論文はフロイトの理論における生理学の影響を論じたものとして先駆的な研究であり、その先駆性ゆえに今日では古典として参照されることの多い論文である。ベルンフェルト以前においては、フロイトはシャルコーと出会って生理学と手を切ったことにより精神分析という独創へと飛躍することができた、とするナラティブが支配的であった。フリッツ・ヴィッテルスの一九二四年の著作(Wittels, 1924)はその好例と言えよう。ベルンフェルトはそうしたナラティブに対抗し、ヘルムホルツ学派の理論およびエルンスト・ブリュッケの下での教育がフロイトに及ぼした影響を論じた最初の人である。

ベルンフェルトはフロイトの著作に分け入る前に『ヒステリー研究』のブロイアーによる「理論的部分」のテキストを読解する。このテキストはそれまでのフロイト研究において軽視されており、ゆえに当時のフロイト著作集にも収録されていなかった。しかしベルンフェルトによれば、このテキストは当時のフロイトの思考を探るうえで必読なのである。というのもブロイアーのテキストはヘルムホルツ学派の生理学を背景にしており、この学派の精神が精神分析の創始者としてのフロイトにも継承されているだけでなく、ブロイアーの理論を当時のフロイトも共有していたとベルンフェルトは考えるからである。

ブロイアーのテキストからベルンフェルトが取り出すのは、脳内興奮、興奮を一定水準に保とうとする傾向性、情動の三つの概念である。まず脳内興奮について、ベルンフェルトによると、脳内の回路に局在化されている点で神経学的側面を、この用語が実際にはエネルギーを意味しているという点で物理学的側面をこの用語は持っている。ここでベルンフェルトはブロイアーが物理学的側面を軽んじている

と主張し、「興奮」を「(ポテンシャル)エネルギー」と換言してブロイアーの理論を整理しなおしている。再整理されたこの理論はヘルムホルツ学派の生理学の物理主義的側面を如実に映し出したものといえるだろう。ここに後年のフロイトにおける力動論および経済論的論点につながるものを見出すのは難しくない。

また「興奮を一定水準に保とうとする傾向性」の概念もまた、ブロイアー自身がフロイトをこの傾向性の命名者と認めていることから明らかなように、フロイト的概念といえる。ブロイアーはフロイトの着想では、余剰となったエネルギーが生体内で生み出したポテンシャルのミクロな不均衡を、マクロな手続きで解消しようとするのが心的装置の経済論的機能となる。この時この力動的不均衡は欲求として経験される。すると、この傾向性は心的装置の経済論的機能を名指したものであり、この機能は端的に放出 *Abfuhr* と表記されてフロイトの精神分析的テキストにおいても頻出する。

「情動」は力動的不均衡をもたらしものとして捉えられ、エネルギー(あるいは端的に量)の概念や生体の運動機能と直接に結び付けられる。そして情動が放出を妨げられ、適切な運動機能が制止されたとき、ヒステリー性の転換が起こる。したがってヒステリーの治療に当たってはこの情動を適切に放出することが有効な手段となる(カタルシス法)。このように心的装置の物理主義的理論がヒステリーの病因論ないし治療論に直結しているのであり、ゆえにフロイトの精神分析理論にも接続しているのである。

しかし、はじめに述べたように本論文の執筆当時はフロイト理論の出発点を生理学との決別に求めるナラティブが支配的であった。ベルンフェルトが「総じて、この理論はあまりフロイト的であるように感じられない。それをフロイトに当てはめるのは彼が初期にカタルシスについて仕事した時期においてでさえ気が進まないことであろう」と述べるのはそうした時流を受けてのことである。しかしベルン

フェルトはこうしたナラティブを覆すべくフロイトとヘルムホルツ学派とりわけブリュッケとの関係を洗い直すのである。

ヘルムホルツ学派と呼ばれるグループはエミール・デュ・ボア＝レーモン、エルンスト・ブリュッケ、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ、カール・ルートヴィヒを中心人物とするグループであり、生理学・生理学において十九世紀半ばに隆盛を誇った。彼ら四人はヨハネス・ミュラーの学生であったが、生気論者であった師に反して彼らは「誰にでもわかる物理的・化学的なものの以外のいかなる力も有機体の内部において関与していない」という信念のもと「生気論を決定的に破壊するために互いに結束していた」。彼らにとって、物理的な力＝エネルギー(当時のドイツ語圏の学術用語では、*Kraft* はエネルギーと同義であった)が唯一の実在であり、生体内であつてもそれは変わらないのである。

ヘルムホルツ学派という命名はベルンフェルト自身によるものようだが、この学派の中心人物はヘルムホルツよりもむしろデュ・ボア＝レーモンであったようだ。それゆえポール・F・クレインフィールドはヘルムホルツ学派という表現は誤解を招くと批判している(Crane, 1966)。

フロイトはウィーン大学のブリュッケの生理学研究所でヘルムホルツ学派の生理学と親しむのだが、ベルンフェルトは若きフロイトをこの学派に駆り立てた要因として二つ挙げている。第一にブリュッケやエルンスト・フライシュル・フォン・マルクソフら生理学研究所の先達が、フロイトにとって模範となるような魅力的な人物であったこと、第二にドイツにおける自然哲学から「物理主義」生理学に至るまでの歴史をフロイトが反復していたことによって「親和力」がフロイトとブリュッケの学派との間で働いていたことがあげられる。

後者について、ベルンフェルトは「物理主義」生理学の隆盛が、それが置き換わったところの自然哲

学の「感激性 emotionalism」を取り込んだが故のことであると主張している。そして「自然哲学への熱中を通してこそ、フロイトはブリュッケの「物理主義」生理学に至った」。十九世紀の知的潮流においても、またフロイトにおいても、いわば自然哲学に対する備給エネルギーがヘルムホルツ学派の生理学に再備給されたのである。こうした符合ゆえにフロイトによるこの学派の生理学への傾倒はある種の必然性を帯びる。したがって、それ以前までに考えられていたのとは反対に「初めからフロイトのこの生理学への興味は受動的なものではなかった」。それだけでなく「精神分析が新しく革命的な主要物であるにもかかわらず、その核心はフロイトがブリュッケの下でした仕事の延長なのだ」。

ところでクレインフィールドは、ベルンフェルトがヘルムホルツ学派と自然哲学のつながりに気付いていることを認めつつも、自然哲学から唯物論への移行というナラティブに単純化しているきらいがあると批判している (ibid.)。ベルンフェルトの記述から読み取る限り、自然哲学からヘルムホルツ学派に引き継がれたのは高々その熱狂の強度であるが、クレインフィールドは内容的にも両者の間につながりがあることを示唆している。「フロイトに対する自然哲学の影響の源泉の一つがまさしく一八四七年の「機械論的」生物物理学〔＝ヘルムホルツ学派〕であるということは逆説的だが真理である」 (ibid.)。

またクレインフィールドはヘルムホルツ学派を唯物論あるいは機械論として単純化すべきではないとも指摘している (ibid.)。というのもデュ・ボア＝レーモンの不可知論はどれだけ科学が進歩しても究極的に不可知なものが残ると主張する点で、カール・フォークトやヤコブ・モレスコット、ルートヴィヒ・ビュヒナーらの生理学的唯物論とは区別されるからだ。

したがって読者は「自然哲学からヘルムホルツ学派＝機械論へ」という表面的な読解に陥らないよう慎重を期す必要がある。とはいえフロイトに対するヘルムホルツ学派の影響は絶大である。むしろその

影響が絶大であるからこそ、慎重を期さねばならないのである。

フロイトがヘルムホルツ学派の精神を吸収したのはやはりブリュッケの生理学研究所においてである。ベルンフェルトによれば、当時の生理学研究においては顕微鏡によるアプローチよりも「生理学的実験（今日の生物物理や生化学を含む）がより完全に王道になりつつあった。しかしブリュッケの研究所では「その「活動中の物理システム」の空間構造を知ることが、この装置において働き、変化させ、再生産する諸々の力について知ることと同様に、必要である」がために、顕微鏡による観察が重んじられていた。

クレインフィールドは十九世紀において生理学と組織学が異なるディシプリンであり、フロイトが実際に従事していたのは生理学ではなく組織学であったと指摘しているが^(ibid.)、ベルンフェルトの主張に対する批判としては的を外しているといえるだろう。上述の通り、ブリュッケの研究所ではそうした区別はなされていなかったのである。

何にせよ「表面的に観察することには」という学生の論文の中の記述に対し「観察が表面的であってはならぬ」と付言したという逸話からも、ブリュッケが観察を人一倍重んじていたことがうかがえる。こうした観察を重んじる精神がフロイトにも継承されており、開業医としての臨床にもつながっているとベルンフェルトは主張する。

ブリュッケの薫育を受けてフロイトは観察の技法とヘルムホルツ学派の精神をわがものとしたのである。『フロイト的』思考はここを源泉とする。その点で『失語症の理解にむけて——批判的研究』は最初の「フロイト的」著作といえよう。この著作でフロイトがテオドル・マイネルトとカール・ヴェルニッケの局在論を批判したのは、彼が脳の器質的因子を排して病因論を構築しようとしたからではなく、

生体内の物理学的な力動を重視するからである。彼は力動が局在性に対立するものであると考えていたために、局在論を批判し異端のヒューリングス・ジャクソンを支持したのだ。この意味でこのテキストが最初の「フロイト的」著作であると指摘したのも、ベルンフェルトのこの論文が最初である。

かくしてベルンフェルトはフロイトがブリュッケからの薫育を通してヘルムホルツ学派の精神を継承し、後年においてもこの精神がフロイトの中で息づいていたと主張する。精神分析理論においては特に経済論の中にそれを見ることが出来る。今日では経済論が物理主義的な企図から成立しているという見方は一般的だが、それはベルンフェルトのこの論文がパラダイムシフトになったからである。

またこの論文はベルンフェルトの伝記的研究の一部をなしてもいる。ブリュッケの下で受けた教育がフロイトの個人史において占める位置は大きく、その研究はフロイト理解において重大な価値を持つ。この論文はその先鞭をつけるものであり、後続の研究に多大な影響を及ぼしている。後続にあたるものとしては、アーネスト・ジョーンズによる伝記をはじめとして、フロイトが受けた神経学的教育に焦点を当てたものとしてはピーター・アマカーのものがある (Amacher, 1965)。またフランク・J・サロウエイはフロイトと生物学の関係を子細に検討し、フロイトの脱神話化された実像に迫ろうとしている (Sulloway, 1992)。

また上述の通り、ヘルムホルツ学派の思想は機械論に単純化できるものではない。ジョージ・マカーリはその思想性をカント哲学との関係から検討し、いかにしてフロイトがそれを継承したかを論じている (Makari, 1994)。マカーリのこの論文はヘルムホルツ学派の思想に深く分け入ることでベルンフェルトの論文を発展させたものだといえるだろう。

上記の通り、ベルンフェルトのこの論文は後続の研究に多大な影響を及ぼしている。この古典的論文

はヘルムホルツ学派との関係に焦点を当てることでフロイト研究に新たな道を開いたのである。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

参考文献

- Amacher, P. (1965). Freud's neurological education and its influence on psychoanalytic theory. *Psychological Issues*, 4(4).
- Craneheld, P. F. (1966). Freud and the "School of Helmholtz." *Gesnerus: Swiss Journal of the History of Medicine and Sciences*, 23(1), 35-39.
- Grubrich-Simitis, I. (1981). Siegfried Bernfeld: Historiker der Psychoanalyse und Freud-Biograph. *Psyche: Zeitschrift für Psychoanalyse*, 35, 397-434.
- Hoffer, H. (1955). Siegfried Bernfeld 1892-1953. *The International Journal of Psychoanalysis*, 36, 66-71.
- Makari, G. J. (1994). In the eye of the beholder: Helmholtzian perception and the origins of Freud's 1900 theory of transference. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 42, 549-580.
- Roudinesco, E., & Plon, M. (1997). Bernfeld Siegfried (1892-1953). In *Dictionnaire de la psychanalyse*

(pp. 107-109). Fayard.

Sulloway, F. J. (1992). Freud, biologist of the mind. Harvard University Press.

Wittels, F. (1924). Sigmund Freud: His personality, his teaching, and his school. Routledge.

-
- (1) ここでは主にエリザベート・ルディネスコ(Roudinesco & Plon, 1997)の記述を参照した。またベルンフェルトが生涯においてなした仕事は、ヘドウィグ・ホッフアーによる死亡記事(Hofer, 1955)ないしイルゼ・グルブリッヒ・ヒルジミティスの論文(Grubrich-Simitis, 1981)が詳しい。